

自分を計算に入れなければ、強くなれる

二人の公務員の志に学ぶ

長かったゴールデンウィークも、終わりました。新緑がまぶしいほど美しく、さらに天候が良いと、ついつい行楽気分になんて浮かれてしまいます。おまけに、山梨の象徴とも言うべき富士山が、世界遺産に認定されました。富士山と共に日々を送っておられる皆様には、さぞかしうれしいニュースではなかったでしょうか。いささか遅きに失したとさえ思われる世界遺産認定は、山梨の今後の発展にとっても、大いに勇気を与えてくれることでしょう。

富士を仰ぎながら志を語ろう

時あたかも、今度の日曜日は、富士吉田での公開例会。余りにもタイミングが良く、私も心躍る思いをしています。しかも、その前の日から、私の主宰する『青年塾』の新入塾生受入れの研修を同じ富士吉田で行います。テーマは、ずばり、「富士山の魅力」です。世界に誇る富士を仰ぎながら、志を新たにしたいと願っています。

私は、普段から、余りにも出かけることが多いので、ゴールデンウィークは、逆に、家の外に出ませんでした。正真正銘、玄関から一歩も外に出ませんでした。こんなことは、まれなこと。家にいて、机の上に山と積んでいた資料を順番に整理しました。おかげで、少し机の上もきれいになりました。まことに、平穏で、心静かなゴールデンウィークでした。外に出掛けないので、お金を使うこともなく、夜は早々に就寝。健全かつ健康的な時間を過ごすことができました。私なりに、「これこそ、ゴールデンウィーク」と実感できました。

今年年初来、三回も海外に出張しました。バングラデシュで進めてきた「日本語教室」の開所式、シカゴ行き、そして台湾での講演と続き、家にいることさえままならない日々でした。そんな中で、今回は、台湾で訪ねた烏山頭ダムとその建設に命懸けで取り組んだ日本人の八田與一さんをご紹介します。

台湾の人達に尊敬される八田與一さん

八田與一さんは、今風に言えば、日本の国家公務員でした。日清戦争に勝った日本が、台湾を統治下に収めたころの話です。台湾南部の広大な嘉南平野は、水の便が悪く、大干ばつ地帯でした。そこに住む人達は、一日がかりで水汲みしなければならず、大変貧しい暮らしをしていました。その平野に、巨大なダム湖を造り、地球を半周するぐらいの水路を巡らせて水を供給して、豊かな穀倉地帯を実現した立役者が、八田與一さんだったのです。日本の若き役人が、とてつもない大計画を立てて、世界的なダムを建設したことは、大変な驚きです。

※裏に続いています

台湾の人達は、今もなお、八田さんを尊敬しています。「台湾人にとって一番恥ずかしいことは、恩知らず」と言います。八田さんが亡くなって、間もなく七十年が経ちます。それでも、台湾の人達は、八田さんのことを忘れることはありません。第二次世界大戦の直後、台湾が日本の統治下から離れた時、数多くあった日本人の銅像はすべて撤去されました。しかし、八田さんの銅像だけは、村人の手でかくまわれ、今なお、烏山頭ダムを見渡す台地にあります。その一事をもってしても、八田さんの志高い生き方、考え方、そして業績がまぶしく見えます。

「清里開発の父」と言われる安池興男さん

私は、八田さんの話を聞いていて、瞬間的に思い出したのは、終戦直後、山梨・清里の開発に尽力した安池興男さんのことです。安池さんもまた、今風に言えば、国家公務員です。奥多摩にできるダムの底に沈む集落の人達が集団で清里に移転して、高原の開発に取り組みます。それは、まことに苦難の多い仕事でした。安池さんは、集団移転してきた人達と苦労を共にしました。広島へ栄転の辞令が出た時、「私は、この人達を見捨てるわけにはいかない」と転勤を断ったのです。

そこに、八田興一さんと安池興男さんの共通した志を感じます。それしても、当時の公務員は、「人のために自らが犠牲になる」ことを少しもいとわなかったことに驚かされます。だからこそ、民間企業に働く人達とは違う尊敬の念を集めていたのでしょう。「公のために、自らを犠牲にしても働く人を公務員と言う」。そんな定義通りの人達だったのです。

今は、公務員の地位もずいぶん落ちてしまいました。それは、基本において、「公務員でありながら、私の利益を求める」からではないでしょうか。自分の立身出世、名誉栄達、あるいは利権を追い求めることが優先されると、人々は、公務員を軽蔑します。まさに、公務員こそ、自らの使命感に生きる志を取り戻すべきではないでしょうか。

任地の人達を作ってくれた墓

八田興一さんの墓は、烏山頭ダムを見晴らす台地の上であり、安池興男さんの墓は、清里の萌木の村の一角にあります。どちらの墓も、地元の人達の熱い思いから建てられたものです。公務員が、自らの任地において、地元の人から墓を建ててもらうことなど、よほどの貢献がなければあり得ないことではないでしょうか。

私は、八田興一さんや安池興男さんの生き様を知るにつけ、大きな勇気を与えられる気がします。

人間は、自分の欲得、損得にとられるほどに、苦しまなければならないのです。私は常に、「人が本当に強くなれるのは、自分を計算に入れない時」と思っています。『夢甲斐塾』の発起人である天野 建さんは、「己のために計らず」と教えました。人は、自分の損得を計算に入れて生きるから、苦しむのです。自分の利益を計算に入れないければ、力強く、勇気をもって生きることができます。人生の正念場にあつては、「自分を計算に入れない」ことを是非とも思い起こしてください。強くなれるはずです。

夢甲斐塾
塾長 上甲 晃